

# 郷土文化財紹介

## 寺院遺跡シリーズ

### <金龍山三井寺遺跡>

金龍山三井寺は、鎌倉時代(1200年以降)から平成22年(2010年)焼失するまで再興を繰り返しながら、およそ800年ほど維持されてきました。その800年を3期にわけて考えてみます。



三井寺江戸期住職墓(上段)と中世墓五輪塔(下段) 下段傾斜地より持ち上げ修復したもの(←)

1期は中世時代の三井寺です。この時代の三井寺のものとして残されているものは、中世墓の五輪塔群とそこから出土した陶器類と今は合郷の蔵田寺に保管されている伝説的修行者役小角の木像倚座像のみです。古文書のような記録はありません。

中世墓五輪塔群は、稲荷山の南端部傾斜地に展開されていたもので、その存在は知られていたのですが、誰もそれらを掘り起こし中から蔵骨器類を取り出そうなどと考えもしないで、永年に亘り放置されてきました。ところが、昭和41年(1966年)盗掘団による中世墓荒らし事件が勃発しました。すぐに対処できず、墓の下の陶器類の多くは盗まれてしまいました。その直後、文化財審議委員をされていた故原寛氏等により発掘調査がなされました。この調査によって、何点かの陶器類が文化財として残ることとなりました。その陶器類の中に、瀬戸陶磁器資料館で復元された梅瓶がありました。またまた保存展示ケースから盗まれてしまいました。ある骨董商

から買い取らないかと持ちかけられたようですが、高値で買い戻せなかったと聞いています。陶器類からは、おおよその年代が分かりますし、美術品としてもたいへん貴重なものです。三井寺中世墓出土の陶器類は、13世紀からのものようです。

役行者倚座像ですが、木造で高さ1m程の実に立派なものです。差頸工法という工法で作られているそうです。平成26年(2016年)11月、富山大学教授であった仏像鑑定の大家である松浦正昭氏が坂下地区の重要文化財の仏像を調査され、この木像は工法から判断して鎌倉時代後期の作であると鑑定されました。また、他の書物では、室町時代には沢山の役行者木像が寺院の開基として据えられたとあります。そして、この木像は明治の廃仏毀釈まで三井寺に在り続けました。



以上から、三井寺は鎌倉時代には既に存在しており、創建はその早い時期ではないかと推測できます。その役割は、真言密教の修験道寺院ではなかったのでしょうか。三井寺背後の稲荷山、その奥の愛宕山、いわゆる坂下の中山の尾根道を駆け後山を経て三井寺に戻るコースは、霊峰恵那山の眺めがよく修験の道に最適ではなかったかと想像して見ました。

2期は江戸時代の三井寺で、住職墓群、地藏堂内の弘法大師座像、古文書類が残っています。

古文書類の1つは、神社に残る棟札です。棟札には、何時、誰が、何を行ったかが記されているので、大切な歴史の証人です。この棟札のほとんどに、三井寺住職が祀り(祭り)を行ったことが記されています。神職名は見当たらないと言っても良いほどです。このことは三井寺の役割が、真言密教



の祈禱寺であることを示しています。また、苗木遠山史料館の文書には、苗木城内での年3回の祈禱は、城内の龍王院、福岡の雲台寺、坂下の三井寺の法印が行うものとされていたとあるそうです。

三井寺は、苗木藩内で祈禱寺としての重責を担っていたのでしょう。その縁で明治元年、三井寺住職は坂岡左京と名を改め、坂下八幡宮の神主となることを苗木城主から認められています。同じ書体の2つの棟札で確認できます。一方は「慶応4年2月1日16世法印深明」とあり、片方は「慶応4年11月9日(明治元年)神主坂岡左京」とあります。

もう一つの古文書は、三井寺13世良明法印が書き残したものです。三井寺の境内は、東西62間、南北62間、敷地面積3844坪と記されています。坂下神社に残る棟札には、三井寺宝壽院(ほうじゅいん)、金龍山壽命院(じゅみょういん)と記されたものがあり、三井寺が本寺のみならず脇寺を少なくとも2つ持っていたことがわかります。かなり規模の大きい寺院であったと考えて良いのではないのでしょうか。

地蔵堂内に残る弘法大師座像は、享保20年(1736)から寛保3年(1744)後まで10年ほど町組庄屋職を務めた八田恵七郎が寄贈したもので、寛延4年(1751)の線刻があると聞いています。



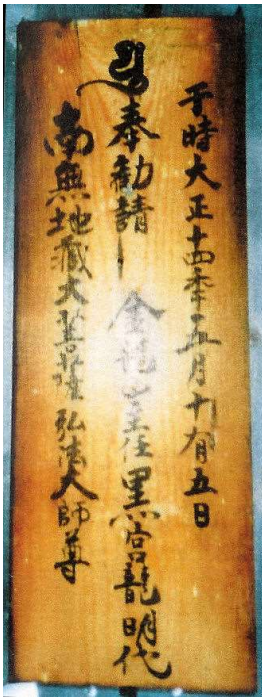
右が弘法大師座像 ←  
地蔵堂内部

住職については、故原寛氏の三井寺過去帳調査によると、初代快応(延宝元年(1673年)入寂)から16世坂岡左京(明治?年入寂)までが挙げられています。

慶応4年(明治元年)から行われた苗木藩の廃仏毀釈では、祈禱寺として重責を担った三井寺をも取り壊されてしまいました。故原寛氏の記録には、坂下の庄屋文書の大部分はここで燃やしたとあります。また、役行者倚座像は下野法界寺へ移されたとあります。取り壊された跡地は、一時坂下役場となり、後に実業学校、小学校へと変わって行き、江戸期の三井寺は跡形もなくなっていました。それでも、小学校校庭には松やもみじや桜などの巨木が残されていて、三井寺の庭の面影を昭和50年頃まで残していました。今は、その上段に五輪塔群、住職墓群などが残るのみとなりました。

時は移りますが、明治32年、矢渕の高木海陸医師を中心にして中山稻荷再興の運動が起こされます。稻荷山の地にもある程度の賑わいが戻ってきたことでしょうか。そして、故原寛氏の記録によれば、高野山金剛峯寺(こんごうぶじ)の許可を得て、大正4年第3期の三井寺が再興されるようです。廃仏毀釈で信仰の場をなくしていた坂下村の住民には、待ち焦がれていた出来事ではなかったでしょうか。この流れの中で、江戸中期町庄屋八田氏が寄贈されたとする石像弘法大師座像は地蔵堂の中に、庚申堂前には石像弘法大師立像が、今も残されることとなったようです。





い通路が上方の三井寺跡へ向かって延びていますが、その入口には石柱が立ち、その正面に「高野山真言宗金龍山三井寺」の文字を刻んでいます。脇には「恵那新四国88ヶ所25番札所」とあります。これは、書籍「ふるさと探訪」によると、大正12年の関東大震災の惨状に心を痛めた中津町(中津川市)の方が発願され、各地に札所が定められたようです。坂下では他に蔵田寺の大日如来が42番、上野薬師堂脇の千手観音が82番と定められています。こうして、三井寺は坂下各地に信仰者を広げ賑わいを取り戻し維持されてきましたが、無念にも平成22年の火災で残されていた過去帳を始め、貴重な文化財もろとも焼失してしまいました。

恵那新四国八十八ヶ所  
第二十五番霊場  
法の船入るか出るか  
迷ふ我身を  
是乃津寺  
乗せてたまへや

島平2自治会亀山宅と坂下保育所の間を狭